小久保は食堂のテーブルで周りを見渡していた。食事を済ませた利用者達は歯磨き粉が付いた歯ブラシとガーグルベースを渡され、自分の席で歯磨きをしたり、自分で出来ない者は職員の介助で歯磨きをしていた。

同じテーブルの織田は、席を離れ自分の部屋に行った。他の男達はまだテーブルについている。

「みんなは毎日何をして過ごしているんだ」小久保はつぶやいた。

「寝てるか、テレビを見るか、ですね」小久保のつぶやきを聞いた藤田が言った。「ここでは他に何もやることがありませんから」

「何も……か」

「人は目的があるからこそ『動く』ものです。しかし、ここではその目的を見いだすことができません。だってそうじゃありませんか、ここを見てください。私たちが行くところは部屋と食堂とトイレ。そして週二回の風呂。それだけです」

「それも施設に決められた時間で動く、いや、動かされている」

「私も、あなたも。ここじゃ主体性は存在しません。私達は受け入れるしかないんです」

「日々の目的がない生活か。朝起きても意味がない」

「朝食を食べる為、毎朝起きるんですよ」織田が冗談交じりに言った。

「その後は」

「そうですねぇ、私の場合はマウスと一緒にのんびり過ごします。そして漠然とした日々の中で老いていきます。昨日あなたに言ったとおり、ここの生活を受け入れています」

小久保はしばらく藤田を見つめた。本当にそれでいいのか。

藤田は小久保の目から自分への訴えを察した。「あまり悲観的に考えないほうがいいですよ。考えたところで何も変わりません。それとも」藤田の丸眼鏡の中にある目が見開いた。「あなたなら一石を投じますか」

「俺はこんな生活を送るために今まで生きてきたわけじゃない」

「当然です。私だってそうですよ。まさか人生の残りを施設で送るなんで想像もしていなかった。しかし、病気になってこんな身体になってしまってはね……」

「ここに生活は存在しない。時間を含め全て管理されている。当たり前の生活が剥奪され、何もすることができない環境に放り込まれている」

「剥奪ですか。学生運動で活躍した方らしい言い方ですね。確かにそうかもしれません。物理的には私はここにいます。しかし、精神的には私というアイデンティティはここには

存在しない感じがします」
「自分の存在価値を見失いそうだ。ここで生きる目的は何だ。朝起きてから寝るまで行くところといえば自分の部屋とこの食堂だけ。この先ずっとだ。これが死ぬまで続くと考えてみろ、俺には受け入れられない」
「では、ここを出る事ができないのなら」藤田はそう言うと口元に笑みを浮かべた。「ここの生活を変えるしかないですね。もしやるのなら私の目の黒いうちにお願いしますよ」
「俺はここに一生いるつもりはない」小久保の正面にいる男が言った。男の声は小さかったが、力強さを感じさせた。
「そういえば」小久保が男に言った。「まだあなたの名前を聞いてなかった。小久保です」小久保は男に向かって右手を差し出した。
「佐々木だ」佐々木は小久保の手を握った。
　小久保の手を握る彼の手は肉厚があり、力強さを感じた。小久保も強く握り返した。二人は手を離さず、互いに相手を見つめ続けた。しばらくすると、佐々木は手を離し、車いすをテーブルから離すと向きを変え廊下の方へ進み始めた。
　藤田が小久保に顔を近づけた。「佐々木さんは寡黙な人でね。彼と会って半年が経ちますが、一度も笑顔を見たことがない。それに職員が話しているのを耳にしたんですが、彼は公務員らしいですよ」
「らしい、本人に聞いてないのか」
「聞いてどうなるんです、過去の事を聞いても、盛り上がらない。未来を閉ざされた者には未来も過去も興味が湧きません」
　小久保は佐々木の後ろ姿を見続けた。「彼は未来を捨てていないようだな」一生いるつもりはないか……まったくだ。

　小久保が入所して約二週間が過ぎた。小久保は自分の部屋で車いすに座り、部屋の窓から外を眺めていた。窓から見える景色には桜の木々があり、桜は施設の敷地内やその周辺に植えられ、見事な花を咲かせていた。
　小久保は敷地内にある一番近い桜を見つめながら思った。ついこの間までつぼみが膨らみ始め、春の訪れを感じさせていたかと思っていたのに、もう満開に近い状態になっている。桜の木が様変わりするように世の中も変化し続ける。そして人はその世の中で自分らしい生活を送り、生き永がらえている。しかしここの生活はどうだ。何の変化もなく、た

だ一日を漠然と過ごしている。そんな生活に価値を求める事ができようか。

小久保は急に自分が世の中から置き去りにされたような疎外感に襲われた。

外では皆が当たり前ではあるが普段の生活を送っている。しかし俺は当たり前の生活が突然奪われ、毎日決められたスケジュールに従って生きていく。そこには自主性が入り込む余地がない。これでは単に生かされていると同じではないか。当たり前の生活を疑似体験しているにすぎない。

小久保は車いすの向きを変え、部屋の中を見つめた。こんな事を考えること自体、今の生活が当たり前ではない証じゃないのか。自主性が失われた施設の中で生き続けていたら、俺という人間は、小久保正明の名前は消え、単なるいち利用者という存在でしかなくなる。こんな生活を数ヶ月送ったら、本当に俺はどうなっているのだろう。アイデンティティがない、いや、なくてもいいと思ってしまう哀れな男になってしまうのか。それを俺は受け入れてしまうのか。

そして自分に問いかけた。ここの生活を変える？　俺にできるのか？　しかし、ここで二の足を踏めば何も変わらないだろう。

小久保は再び身体の向きを窓に戻し桜に目をやった。春の風が桜の木に触れ、桜の枝がゆっくりと揺れ始めると途端に桜の花びらが春の風に乗りながら解き放れた。小久保の視線が花びらの演舞から春の青空に移った。そして雲ひとつない青空を見つめながら思った。施設の外に見える青空を見ることはできるが、外の暑さ寒さを感じることはできない。施設内の空調は常に管理され一定の室温に保たれている。この中では春の陽射しをうけ、心地よい春の暖かさを肌で感じることができない。それは春だけではなく、日本の四季すべてで感じることもないだろう。小久保は安田講堂で会った男の言葉を思い出した。

「小久保君、将来の日本で君を必要とする時が必ず来る。その時まで今の志を忘れるなよ」

俺は『生きている』実感を取り戻す。

小久保は車いすを動かすと部屋を出て藤田の部屋に向かった。

小久保は藤田の部屋の前に着くと、ドアをノックしたあとゆっくりと開けた。「小久保だ。ちょっといいかな」小久保が部屋を覗き込むと、藤田はテレビの前で車イスに座っていた。

「ああ小久保さん。どうぞ中に入ってください」テレビを観ていた藤田はテレビから目を離し、小久保を見ながら言った。

小久保は藤田のそばまで近づいた。「肩を貸してもらいたい事があるんだが」
「ほう」そう言うと、藤田はテレビを消し、ゆっくりと身体を小久保に向け、しばらく小久保を見続けた。
小久保は何も言わず藤田の返事を待っている。
やがて藤田は口元に笑みを浮かべ始めた。「まあ、いいでしょう。運良く今日の午後は予定が入っていません」そう言うと、藤田は車イスの背もたれに寄り掛かった。「何を企んでいるのですか」